

英語の魅力と習得法 —日本の英語学習200周年を記念して—

佐藤 義隆

文化創造学部文化創造学科

(2008年11月5日受理)

The Enchantments of English and Useful Tips for Learning English —In Honor of Two Hundredth Anniversary of English Learning in Japan—

Development of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

SATO Yoshitaka

(Received November 5, 2008)

1 日本の英語学習200年の歴史

日本の公式の英語学習は、イギリス船「フェートン号」が日本へやってきた1808年の翌年、1809年に始まりました。今年は、日本が英語学習を始めてちょうど200年になります。それを記念して、英語学習についてまとめてみたいと思います。

19世紀のはじめ、ナポレオンがオランダを征服すると、イギリスは東洋各地のオランダ植民地を奪おうとしました。その流れの中で、文化5年(1808年)にイギリス船「フェートン号」がオランダの国旗を掲げて長崎へ来ます。オランダ船とばかり思って出迎えた長崎通詞やオランダ商館員を捕えて湾内を測量し、燃料、食料を出させて去っていきます。長崎奉行は責任をとって切腹し、これ以降、海外政策が強化され、1825年には異国船打ち払い令へと発展していきます。一方、この事件で、オランダ語以外の外国語学習の必要性を痛感した幕府は、翌1809年にオランダ通詞達に英語とロシア語の学習を命じました。ロ

シアの脅威も迫っていたからです。これが日本の公式の英語学習の始まりになりました。明治維新より59年前のことです。

日本の英語学習が始まる前にも日本人は既に、中国語、朝鮮語、ポルトガル語、オランダ語等を学んでいます。『外来語辞典』をみると、これらの言語が日本語の中に根付いていることがわかります。その一部を紹介すると、中国語からは、チャンコ、イス、イチョウ、カバン、ソロバン等、朝鮮語からは、マツリ(祭)、ミノ(味噌)、パッチ(ももひき)、コマ(正月に遊ぶ)等があります。この他に頭に「コマ」をつけると朝鮮からきた事物であることを示し、コマいぬ、コマ錦、コマ笛、コマねずみ等があります。ポルトガル語からは、カステラ、タバコ、テンプラ、パン、カルタ等があります。オランダ語からは、ゴム、チョッキ、ランドセル、スコップ、オテンバ等があります。外来語に興味のある方は、『外来語辞典』の巻末をみると、各国別の外来語一覧表が載っていますので是非見て下さい。

19世紀の日本における外国語塾の一つで

あった緒方洪庵の「適塾」のオランダ語学習システムは、日本人がその後英語を効果的に、そして体系的に学ぶのに役立ちました。1809年以來、日本の知識人達は英語をマスターするために必死に努力し、数々の英語学習に関する本を出版します。通詞本木庄左衛門は、1811年に英単語や会話文を載せた『厄利亜興学小筈』（あんげりあこうがくしょうせん）という本を出版し、1814年には我が国最初の英和辞典である『厄利亜語林大成』を出版しました。特に後者は、アルファベット順に配列された初の英和辞典で、縦書きで約6千語を収録し、オランダ語の同義語も添えられています。また本木は、両書とも発音をカタカナで示し、実用性を追求しましたが、*Are you an English man?* という英文に、「エレ・ユー・エン・エンゲリス・メン」と記すなど、オランダ語のような発音がそのまま記されていて、完璧なものではありませんでした。それでもこのような表記法は、以後の外国語学習関係書の編集に大きな影響を及ぼし、外国語を身近なものにするために役立ちました。

しかし、このようにして始まった辞典編纂事業も、通詞達の多忙で停滞し、ペリー来航時に通詞を務めた堀達之助編纂の名著『英和対訳袖珍辞書』が刊行されるのは文久2年（1862年）のことです。因みに、この辞書の草稿や校正原稿が古書店で発見されたニュースが平成20年の中日新聞に載っていました。この発見によって、例えば、*Cassock* という単語の訳が草稿段階では「僧ノ上着ノ名」となっていましたが、初版では「ケサ（袈裟）」となっていることがわかり、訳語が検討されていた過程が初めて明らかになりました。

本木や堀の仕事の他には、1840年に渋川敬直が初めて英文法書を翻訳しています。原書は *Lindley Murray* の *English Grammar* (1795) の蘭訳本 (1822) でした。これを渋川は『英

文鑑』というタイトルで刊行しています。1848年には、アメリカ人青年 *Ranald MacDonald* が利尻島へ漂流を装って上陸し、そこから長崎へ護送され、オランダ通詞14名に英語を教えました。これが英語を母語とする教師の第一号となりました。1856年には、蘭学を主に、英学を副としたオランダ語と英語の学習機関である蕃書調所が幕府によって創設されました。堀達之助編纂の『英和対訳袖珍辞書』も幕命によってこの蕃書調所で作られたものでした。蕃書調所は1862年に洋書調所と改称され、1863年には開成所と改称されます。

1859年には中浜万次郎（ジョン・万次郎）が『英米対話捷徑』を出版しました。万次郎は1827年に土佐の漁師の家に生まれますが、14才の時に漁に出て嵐にあい、アメリカの捕鯨船に助けられてアメリカへ行き、10年間のアメリカ生活ののち帰国し、幕末から明治にかけて国のために貢献しました。1860年には通訳として咸臨丸でアメリカへ行っています。この時万次郎はアメリカ土産として、ウェブスター辞典、ミシン、カメラ、ネクタイ等を買ってきています。ミシンのことは *sewing machine* といいますが、その頃の日本人は、*sewing* は省き、「マシーン」は「ミシン」となまって使うようになり、今の「ミシン」という言葉ができたわけです。ミシンは当時アメリカの家庭で大流行していた最先端の科学技術をいかした実用品で、13代将軍家定への献上品としても贈られたものでした。余談ですが、明治時代はアメリカ、ドイツ、イギリス等からミシンを輸入しましたが、よく壊れたので、日本人の職人がそれを直しました。その一人が名古屋の安井兼吉で、それを見ていた二人の息子、正義と実一が後に国産ミシン第一号を作ることになります。こうして、兄弟で作ったということで「ブラザーミシン」が誕生することになります。余談ついでにも

う一つ、machineを「マシーン」と発音することに違和感を感じる人もいます。「chi」は「チ」じゃないのかと思われるかもしれませんが、実は英語の単語の中ででくる「ch」には3種類の発音があります。イギリス系は「チ」と発音します。church, bench等がそれです。ギリシャ語系は「ク」と発音します。Christ, chorus等がそれです。もう一つフランス語系があって、これが「シ」と発音します。Machine, chandelier等がこれなのです。これで、アメリカの州Michiganを「ミシガン」と発音することも理解できると思います。アメリカの初期の探検者や植民者にはフランス人が多く、Michiganという地名も、“great lake”を意味するインディアン語をフランス語化して作ったために、Michiganが「ミシガン」という発音になったということです。

また、「適塾」で塾長まで務めた福沢諭吉は、1859年に横浜見物に出かけ、今後は英語が必要になると痛感し、英語の独学を始めています。こうして英語を独学し始めた福沢は、9年後の1868年には、慶応義塾で、原書で経済学概論を講義していくまでに英語を習得していきます。「意志あるところ道あり」(Where there is a will, there is a way) ですね。慶応義塾での最初の授業の時は、上野戦争真っ只中の時でした。上野戦争とは、上野に立てこもる幕府軍を、倒幕側の薩摩隊が攻撃したものでした。中立を保っていた福沢は、塾生の多くが官軍に加わる中、残った塾生18人と最初の授業を行います。開口一番福沢が語った言葉は、“The pen is mightier than the sword.”(「ペンは剣よりも強し」)でした。「これからの時代は、殺し合いで物事を片付けようとするのは愚かしいことだとわかる時がきつときます。弁論と筆によって人を説くものが勝利者となる時がきつときます。私達は

卑怯者でも、臆病者でもありません。こんな日、こんな時に、ここに留まって授業をする。そのことが、あの愚かしい大砲の音に対する、私達の戦いでもあるのです。」こう言ってから、福沢は先程述べた経済学概論を原書で講義していくのです。この時の彼の不戦の精神は多くの人々に受け継がれていると思います。さすが1万円札ですね。因みに、渋谷のギャルは1万円札のことを「諭吉先輩」というようです。

明治・大正期の英語学習は、蘭学の解読(読んで訳す)を踏襲し、音声や発音にはそれほど注意せず、解読を通して内容の把握を重んじることが優先されました。これは日本人教師が教える場合に多く見られ、「変則英語」と呼ばれました。これに対して、外国人教師や宣教師が英語を教える時は、音声、発音を重視し、反復練習を繰り返し行いました。これは「変則英語」に対して、「正則英語」とよばれました。有名人の多くも「正則英語」学校へ通いました。一例をあげると、菊池寛は明治43年(23歳)に夜学の正則英語学校へ行っています。詩集『第百階級』で有名な草野心平は、大正9年(17歳)に慶応へ通いながら正則英語学校でも学んでいます。山本周五郎は、大正5年に勤め先の質屋の主人に夜学の正則英語学校へ通わせてもらいました。山本は、学歴に「正則英語学校卒」と誇らしげに書いています。本名は清水三十六(さとむ)ですが、ペンネームにはこの大恩ある質屋の主人の名前を使いました。質屋の主人だった山本周五郎さんも、まさか自分の名前がこのような形で永遠に残っていくことになるなんて想像もしていなかったことでしょう。まさに「情は人のためならず」ですね。

明治から今日までの英語学習目的論は、教養としての英語を学ぶ「変則英語」と、実用としての英語を学ぶ「正則英語」との闘いに

あったと言ってもよいでしょう。両者は優劣をつけるような問題ではなく、車の両輪のようなものだとは私は思っています。教養論の論客としては、内村鑑三、岡倉由三郎、金子健二、福原麟太郎、長田新、渡部昇一、等がいます。実用論者としては、ハロルド・パーマー、チャールズ・フリーズ、平泉渉、鈴木孝夫等沢山います。

日本の200年にわたる英語学習の歴史を簡単に概観してみました。今後の英語学習はどのようなべきかを考えてみたいと思います。地球レベルでの話し言葉によるコミュニケーションを必要とするような状況ではなかった時代は、留学生、外交官、通訳等の一部の人々を除いて、人文的教養を目的とした英語学習が主流でもよかったです。現在は世界が急激に縮小し、グローバル化が広がり、国際交流が日常的なものになっています。その結果、みんなが地球社会におけるコミュニケーション手段を身につけることが緊急課題になっています。従って今後は益々実用英語の習得が第一だと思います。しかし、もう一方で、異文化を知り、異民族と共存する態度も育まなければならないと思います。要するに、これからの英語学習の目的は、地球共通語としての英語のコミュニケーション能力を高めるとともに、自己と異なる文化、個人を認め、異文化の価値観を尊重する心を培うこと、とまとめることができると思います。

それにしても、英語学習が始まって200年になるのに、私達の英語は中々上達しません。はやった言葉を織り込んで言えば、「どんだけ〜」やっても IKKO にもものにならないのはなぜなのでしょう。日本語と英語では周波数が違うので聞き取れないという指摘があります。人の耳は幼児期まではあらゆる周波数の音が聞き取れる構造になっているそうで

す。しかし成長していくにつれて、自国の言語の聞き取り能力が発達する一方で他言語の周波数帯の音は聞き取れなくなっていくそうです。日本語は世界で最も低音域で話す言語で、125~1500ヘルツ、アメリカ英語は1000ヘルツ~4000ヘルツ、イギリス英語は2000ヘルツ~12000ヘルツだそうです。低い周波数帯の日本語を話す日本人が高い周波数帯の英語を学んでいるので、中々上達しないというわけです。この難問を解決して英語を聞き取れる耳にする教材を開発していろいろなところで紹介している広告を皆さんも見たことがあると思います。それを活用するのもいいですね。

また、英語が上達しないもう一つの原因として、英語の音の連続があります。英語では連続する音が影響し合って変化します。主なものは4つあります。

(a) 連結 (liaison)

連結とは、前後の音がつながりあって、別の音になって発せられるものです。例えば、far awayだと、「ファー」と「アウエイ」を別々に発音するのではなく、「ファーラウエイ」と発音したりすることです。“on it”は「オニット」になりますし、“run away”は「ラナウエイ」になります。“take it easy”は「テキリイージ」と聞こえてきます。

(b) 短縮 (contraction)

短縮とは、縮めて発音することです。“There is”を“there’s”「ゼアズ」と発音したりすることです。

(c) 同化 (assimilation)

同化とは、隣接する二つの音が互いに影響しあって、別の音に変化する現象をいいます。“Did you go there?”は「ディジューゴウゼア」になりますし、“Mind the door.”は、「満員グドー」に聞こえます。

(d) 脱落 (elision)

脱落とは、音が消えてしまう（脱落する）現象です。“I don't know.”は「アイドンノウ」に聞こえますし、“Don't mind.”も「ドンマイ」に聞こえます。“Hold tight.”は「包帯」に聞こえてきます。

また、平成4年の留学中におきた服部剛丈君の射殺事件の後、渡航者用に「危険告知英語」が新聞紙上で紹介されたことがありましたが、その中の殆どが、英語の音の連続を知っていないと聞き取れないものばかりでした。「さがれ！どけ！」を意味する“Back off”は、「バックオフ」ですし、同じく「さがれ！どけ！」の“Get back”は「ゲッベアック」ですし、「やめろ！よせ！」の“Cut that out”は「カッツアラウト」ですし、「あっちへ行け！消えうせろ！」の“Get lost”は「ゲッラースト」ですし、「本気だぞ！」の“I mean it”は「アイミーニト」と表記されています。

この他に英語にはアクセントやイントネーションもあって独特の音に聞こえてくるので、明治時代の話ですが、西洋人が犬のことを話している時に聞こえてきた英語「うちの犬はぶち犬なんですよ」の“spotty”（ぶち）が「ポチ」に聞こえ、“come here”が「カメ」に聞こえて、それを犬の名前だと勘違いして、明治時代にはそれにあやかって、ポチとカメという犬の名前がはやったそうです。machineを「ミシン」と聞いた現象がこうして他にも沢山あったということですね。

発音に関する難しさが英語の上達を阻んでいることは間違いないことですが、私がこの場で取り上げたい上達しない原因は周波数帯の問題でもなく、音の連続の問題でもなく、「切実さ」の問題です。通詞達やジョン・万次郎や福沢諭吉のような人達は、英語学習の必要性を「切実に」感じて取り組んだ結果、英語をものにするのができたのだと思います。一方、学校の授業に英語があるから学習

しているといった場合は、この「切実さ」を感じる事ができず、その結果ものにする事ができないのだと思います。

話しは少し逸れますが、夏目漱石は幼い頃、里子に出され、自分の本当の両親が誰だかわからない時期がありました。漱石は1867年1月5日に生まれました。1月5日は干支では庚申の日にあたり、大きくなると大泥棒になるといわれた不吉な日でした。しかし、名前に「金」の字をつけるとこの運命を免れるといわれていたので、両親は金之助と名付けました。これが漱石の本名です。漱石が生まれた年は明治に変わる寸前の激動期で、幕府の役人をしていた父は自分の身分さえあやうく、子育ての余裕がなくて里子に出した訳です。そんな中漱石は、小学生の時に読本の中で読んだ、「勉強して賢くならないと、世の中に見捨てられる」という一文を見て、自分の境遇と重ねあわせ、必死で勉強して、私達が知っている夏目漱石になっていったのです。漱石のこの切実な人生体験が漱石の原点になったのです。しかし、誰もが漱石と同じ切実な人生体験をするわけではありません。漱石と同じ体験をしなくても切実な人生体験をさせてくれるのが想像力です。想像力の大切さはチャップリンも彼の作品の中で言っています。「人生に必要なのは、勇気と想像力と少しばかりのお金」と。本を読んだり、芸術や音楽を鑑賞して、想像力を培い、その想像力で様々なことに接すると、切実で、深い人生が送れるのではないのでしょうか。漱石は大泥棒になる運命を免れ、大作家になりましたが、ある意味ではやはり大泥棒になったと言うこともできるのではないかと私は思っています。素晴らしい作品を書くことによって人の心を奪ったという意味では、脱線が長くなりました。もとへ戻ります。

それでは、英語学習に切実さを感じられな

い場合、どうしたら英語をものにした先人達のようにエネルギーに英語学習に取り組めるのでしょうか。幾つか考えられます。そうした先人達の伝記を読めば、その情熱が伝わってくるでしょうし、地球規模でのコミュニケーション手段である英語の習得がこれからはみんなに必要なだという思いを強くすれば、英語学習も切実さを帯びてくると思います。また、就職に有利になるように TOEIC でいい点を取るためでもいいですし、好きな人を外国へ連れて行き、自分が英語で現地の人々とコミュニケーションしてあげたい！でもいいわけです。はやっている言葉を使えば、英語の勉強が「実に面白い」と思えるようにすることが大事ですね。要するに、意識を変えて切実さを生み出すことが何よりだと思います。そのためには、今まで触れてきたように、様々な切実に取り組む工夫をすることが必要ですが、英語そのものの魅力を知ったり、習得法について考えてみることも英語学習に力を込められる一要素だと思い、本稿では「英語の魅力と習得法」について書いてみることにしました。

2 英語の魅力

次に述べる4項目のうち、(1)と(2)は、村野井仁他著の『実践的英語科教育法』に書いてあることをまとめたものです。

(1) 英語はより多くの人々とのコミュニケーションを可能にする

① 英語の運用能力を身につけると、地球上のより多くの人々と意志を伝達しあう機会が増えます。

これは、英語が世界中で公用語 (an official language)、国際語 (an international language)、国際補助語 (an international auxiliary language) として使われているからです。英国は17世紀から19世紀まで

植民地政策を進め、アジア、アフリカ各地に英語を第2言語とする国が生まれました。20世紀には、アメリカ合衆国が政治、経済、軍事の面で強大な力を持つようになり、英語の世界を広げるのに大きな役割を果たしました。現在、英語使用者総数は、世界の人口のおよそ3分の1だと言われています。異なる言語を母語とする人々が、英語を媒介として国際的なコミュニケーションを世界規模で行っていることがわかります。

② 英語が使用されている分野は多方面にわたっています。

世界的な物流、商取引、金融などの経済活動、航空・海運などの国際交通システム、インターネットをはじめとする国際通信などです。この他にも、論文の多くが英語で書かれますし、UN、ASEAN、EU、NATO、OPEC、などの国際機関においても使われています。また、マスコミや映画、音楽でも英語は世界的に用いられていて、様々な情報や文化が英語を媒介にして国際的に広がっています。さらに、環境問題、民族紛争問題、エネルギー問題、人権問題など、国を超えて協力しなければ解決できない問題に取り組む際にも英語が役立っています。

③ しかし、英語が国際補助語としてグローバル・スタンダード化すればするほど、英語を使える人と使えない人との間に社会的格差が生じる恐れがあります。

こうした不平等な関係が生じることを防ぐためには、一つにはより多くの言語を公用語として認め、多言語主義、多文化主義を推し進めていくことが重要でしょう。もう一つは、多様な英語を許容することがあります。英語で不自由なくコミュニケーションできるのであれば、

それぞれの独自性を伴った特徴ある英語を認める姿勢です。インドにはインドの、フィリピンにはフィリピンの日本には日本の英語があっというわけ、こうした英語は world Englishes という言葉で表現されています。

(2) 人間性・知性を育てる

英語学習に限らず、全ての外国語学習は学習者の人間性・知性を高めることが大きな意義の一つとされてきました。この考えは、外国語学習の教養主義的側面になりますが、内容的には4つに分けることができます。

① 国際感覚が育てられる

現在の世界は、国々が相互に依存しなければ存続できない状況にあります。こうした時代に最も大切なことは、お互いをよく知って、偏見や差別意識をなくし、世界中の人々と仲良く共生していくための資質である国際感覚を育てることですが、英語をはじめ外国語を学習するこの資質を育て、伸ばすことができます。

② 個人の適切なアイデンティティが育てられる

アイデンティティとは自分は何者かということです。自分の正体は何か、日本の正体は何か、といつも考えていないと、自分なりのそれらに対する考えを持つことはできません。イギリスの作家キプリングは、「イギリスしか知らない者が、どうしてイギリスを知っていると言えようか」と言っていますし、ドイツの作家ゲーテも、「外国語を知らない人は自国語をも知らない」と言っています。アイデンティティについてしっかりした考えを持っていないと、英米人等の英語母語話者を自分より優れた民族と考えて、自分達の文化をそれらの文化よりも劣った

ものと考えて卑屈になったり、逆に偏ったアイデンティティが強すぎて、狭いナショナリズムや自民族中心主義 (ethnocentrism) に陥って排他的になる場合もあります。卑屈になったり、排他的になったりしないためにも、英語をはじめとした外国語学習を通して、お互いをよく知って適切なアイデンティティを育てることが必要だと思います。

③ 知的訓練になる

英語をはじめとした外国語の複雑な言語体系を学習することによって、学習者の論理的思考力が育つと思います。データを記憶し、想起する力、情報を収集し、分類し、整理する力、推論する力、識別力、分析力、観察力、課題解決力等が育てられると思います。また、母語とは違う言語を学習することによって、言語そのものへの関心も深まり、母語についての理解力も深まると思います。

④ 積極性が育つ

日本は先進国の言語を学ぶことによって、先進国の文化・文明を輸入してきた長い歴史を持っています。朝鮮語、中国語を通して仏教文化を取り入れ、オランダ語、ドイツ語、フランス語を通してヨーロッパ文明を輸入しました。外国語は優れた文化や文明を伝える媒介であり、外国語で書かれた文書を読み解くことによって情報を得るだけでなく、新しいものの、自分にはないものを積極的に取り入れる態度をも養うことができます。

(3) 英語には屈折 (語形変化) が殆どないので学習しやすい

ここに紹介する内容は、桜庭一郎著『英語史概要』を参考にしました。

OE (OLD ENGLISH: 古期英語: 700年~1100年頃) には、名詞、形容詞、動詞に極めて複

雑な語尾屈折がありました。また、名詞には、男性名詞、中性名詞、女性名詞の区別があり、いずれも、主格（～が）、属格（～の）、与格（～に）、対格（～を）によって語尾屈折をしていました。一例として、OEの強変化男性名詞 *stan* (*stone*) の場合を、現代英語と比較してみたいと思います。

	OE		代英語	
	単数	複数	単数	複数
主格	<i>stan</i>	<i>stanas</i>	<i>stone</i>	<i>stones</i>
属格	<i>stanes</i>	<i>stana</i>	<i>of a stone</i>	<i>of stones</i>
与格	<i>stane</i>	<i>stanum</i>	<i>stone</i>	<i>stones</i>
対格	<i>stan</i>	<i>stanas</i>	<i>stone</i>	<i>stones</i>

現代英語には屈折がなく、如何に学習しやすくなっているかがわかります。ドイツ語やロシア語をはじめ、多くの言語には今も屈折変化が残っていて、学習はそれだけ一層大変です。複雑な屈折を持っていたOEもME(MIDDLE ENGLISH: 中期英語: 1100年頃~1500年頃)、ModE (MODERN ENGLISH: 近代英語: 1500年以降) となるにつれて、この屈折を失っていきました。この英語における屈折の消失は、英語の性格を大きく変えました。屈折によって表されていた語と語の関係が、機能語 (function word: 前置詞, 助動詞, 接続詞, 冠詞, 関係詞, 代名詞) や語順によって示されるようになったのです。デンマークの言語学者オットー・エスペルセンは、「SVO」語順の文が、OE時代の文学である『ベオウルフ』には16%しかないのに、19世紀の作家の文章には82~97%あることを指摘しています。語順が固定化していたことがよくわかります。

- (4) 英語と日本語の語彙はともに古来語と外来語で構成されているという共通点があって興味深い
英語と日本語は、語彙の成分からみると、

古来からの語彙の他に多くの外来語を含んでいる点が共通しています。こうしたことを研究した書物は多くありますが、ここでは、渡部昇一氏の『日本語のこころ』に書いてあることをもとに紹介していきたいと思います。話をわかりやすくするために、日本語の語彙の成分の話から始めます。

① 日本語の中の古来語と外来語

日本人が有史以前から使い続けてきた古来の語彙を「大和言葉」といいます。これは訓読みの言葉のことです。一方、日本語に取り入れた外来語の中心は漢語で、音読みの言葉のことです。「くちづけ」というと大和言葉になり、「せつぶん」というと漢語になります。大和言葉は心が内向的な時に使います。和歌、俳句、フォーク・ソング、ポピュラー・ソング、演歌等は殆ど大和言葉で書かれていることがわかります。

和歌の例：久方の光のどけき春の日にし
づ心なく花の散るらむ

俳句の例：古池やかはづ飛び込む水の音

歌詞の例：白い花が咲いてた ふるさとの
遠い夢の日 さよならと言ったら
黙ってうつむいてた お下げ髪 かな
しかったあの時の あの白い花だよ

外来語 (漢語) は心が外向的な時に使います。心が野心に満ちている時とか、精神が知的に働いている時とか、知的議論をしている時とか、学術論文を書いている時等に漢語を多く使って言ったり、書いたりします。法律文書の大部分は漢語を多用しています。「大和言葉」の世界が「情」の世界だとしたら、外来語 (漢語) の世界は「知」の世界だという言い方もできるでしょう。日本人は昔からこのように大和言葉と外来語 (漢語) を使い分けてきました。

② 英語の中の古来語と外来語

日本語の大和言葉と外来語（漢語）との関係がそっくりそのまま英語にもあります。日本語の大和言葉に相当する英語の古来語は「ゲルマン語」です。これは「古英語」とか、「アングロ・サクソン語」とかも言ったりします。5世紀半ばに、北ドイツやデンマーク地方からブリテン島へ移住してきてイギリス人になった人達が11世紀まで使っていた言葉です。ところが、1066年におこったノーマン・コンクエストでイギリスはフランスの支配を受け、話し言葉の公用語はフランス語に、文章の公用語はラテン語になり、宮廷、貴族、高位聖職者、学者、都市の大商人、騎士等の上流階級はラテン系言語（ラテン語、フランス語）を使うという時代が300年程続きました。その結果、日本語の漢語に相当する外来語（フランス語、ラテン語）が英語の中に大量に入り込んでくることとなったのです。

英語で「牛」は「cow」なのに「牛肉」はなぜ「beef」なのか。英語で「豚」は「pig」なのに「豚肉」はなぜ「pork」なのか。この謎もこの歴史と関係があります。上流階級はフランス語を使っていますが、庶民は昔からの英語（ゲルマン語）を使っていて、牛や豚の飼育は庶民がしていましたので、庶民はゲルマン語の cow, pig を使っていましたが、食卓にのせる時はフランス語に変わったので、フランス語の牛肉にあたる boeuf が英語化した beef に、フランス語の豚肉にあたる porc が英語化した pork になったからということになります。この他にも英語にはフランス語由来のものが多く、一例をあげれば、salary は salaire から、servant は servante から等、数

え切れずあって、英語の外来語率は7割以上あります。英語の中の外来語はフランス語やラテン語だけでなく、他にもいろいろありますので、少しだけ一例をあげておきます。ギリシャ語からは church, box, apostrophe, ラテン語からは cheese, street, education, デンマーク語からは knife, leg, フランス語からは上であげたものの他に pay, very, イタリア語からは piano, studio, スペイン語からは mosquito, stampede, オランダ語からは yacht, freight, ドイツ語からは halt, puddle, アラビア語からは syrup, sofa, ペルシャ語からは candy, check, インディアン語からは tomahawk, chocolate 等です。

以上のように、英語と日本語は語彙の成分から見ると、古来語と外来語から成っていることがわかりましたが、それぞれの働きも、英語と日本語は同じで、英語の古来語である古英語（ゲルマン語、アングロ・サクソン語）は心が内向的な時に使い、外来語（フランス語、ラテン語、ギリシャ語）は心が外向的な時に使うということです。

作者の心が内向的になっている時の例として、『宝島』で有名なスチーブソンが自分の墓用に作った墓碑銘をみてみましょう。

Under the wide and starry sky,
Dig the grave and let me die.
Glad did I live and gladly die,
And I laid me down with a will.
This be the verse you grave for me:
Here he lies where he longed to be;
Home is the sailor, home from sea,
And the hunter home from the hill.

この墓碑銘には一つも外来語がなく、全

て古英語で書かれています。これに合わせて、片山伸氏はこの訳を全て大和言葉で訳しています。

星くづきらめく大空の下、
墓場をほりてわれはねむらん、
たのしく住みし世たのしく逝きて
わが身はうれしく墓場にねむる。
わが墓に彫る歌はかくあれ——
「自から求めし茲にぞ彼は眠る、
舟子は帰りぬ、海よりかへりぬ、
獵夫(さつお)は返りぬ、山よりかへりぬ」
スチーブンスンの墓碑銘を読んでわかることは、中学生でもわかる単語が多いということです。古英語は英語の基本語彙であり、日常会話に使われる基本語彙1000語のうち、7割が古来からあるゲルマン語系の語彙なのです。中学では主にこの基本語彙を中心に教えています。主なゲルマン語系の基本動詞には、get, give, have, take, make, do 等があります。

次に、心が外向的になっている時の文章の例として、マコーレーの『英国史』の文章をみてみましょう。

After ten months of *assiduous toil*, the Houses, in *September 1641*, *adjourned* for a *short vacation*, and the King *visited* Scotland. He with *difficulty pacified* that kingdom by *consenting* not only to *relinquish* his *plans of ecclesiastical reform*, but even to *pass*, With a *very bad grace*, an *act declaring* that *episcopacy* was *contrary* to the word of God.

10か月間非常に努力したあげく、両院は1641年9月に閉会して短い休暇に入り、国王はスコットランドを訪ねた。彼は教会改革に関する自分の計画を放棄するのみならず、司教制度は神の言葉に相反す

ることを明言した法令をしぶしぶ通過させることによって、やっとのことでこの王国を鎮めたのであった。

ここに使われている単語は数字を除けば58個で、そのうち、斜体字で書いてあるのが外来語で、普通の活字体で書いてあるのが古英語です。内訳は外来語20、古英語38ですが、古英語の中の機能語を除けば内容語は14 (ten, months, Houses, short, King, Scotland, kingdom, not, only, even, bad, was, word, God) だけで、この中の外来語は全て内容語で、内容語だけでいうと、外来語の方が多いのです。英語の中に含まれる外来語由来の言葉が如何に多いかがわかります。

因みに、辞書なしで英語で書かれた小説や論文を読むには2万語の語彙が必要だと言われていますが、この中に含まれる古来からの単語つまりゲルマン語系の単語は1割の2千語ほどです。9割が外来語系ということになります。英語の会話表現では、ゲルマン語系の動詞とラテン語系の名詞を組み合わせる方がより自然な会話表現だと言われています。「予約する」というときも、I reserve～というより、I make a reservation～といったほうがより自然ということです。日本語の和漢混淆文のようなものですね。

3 英語の習得法

日本の英語学習の歴史と英語そのものの魅力を概観し、英語への興味を増して頂けたのではないかと思いますので、英語学習への取り組みに向けての最後の仕上げとしまして、英語習得法に触れておきたいと思います。

(1) 英語学習の目的をはっきりさせること

社会言語学者の鈴木孝夫氏は、外国語学習が上達しない大きな盲点は、学習の目的をはっきりさせていないことだとして、学習目的によって言語を3つに分類しておられま

す。

① 目的言語

例えば、我々がトルコの文化や民族について学ぶためにトルコ語を学ぶ場合のように、その言語自体を最終目標として学ぶ場合の言語のことです。

② 手段言語

これは、その言語に蓄積されている人類の知識や学問を入手するために学ぶ場合の言語のことです。物理学や生物学を学ぶためにフランス語やドイツ語を学ぶのがこれにあたります。緒方洪庵の「適塾」で福沢諭吉達が学んでいたオランダ語もこれにあたります。

③ 交流言語

これは、国際交流の手段として学ぶ場合の言語のことです。現在の英語の国際的役割を考えると、主に英語の学習がこれにあたります。

自分の英語学習の目的は、この3つの言語のうちどれなのかをはっきりさせ、それを常に意識化していけば、それが一つの大きな動機付けになって、継続的に英語学習を続けていくことができると思います。しかし、最終的には目的言語、手段言語、交流言語は常に連動していて、一つに絞ることはできず、どれで始めても、自分のその言語への思いが深まるにつれて、他の分類の分野にも入っていくことになると思います。ジョン・万次郎がよい例で、交流言語から始まった彼の英語学習は、最後には東大の教授にまでなるのですから、その中に手段言語、目的言語としての英語学習も当然入り込んできたはずで

(2) 英語のシンタックス (文構造) をつかむこと

英語は SVO シンタックス、日本語は SOV シンタックスという言い方をします。SVO 型とは、S (主語)、V (動詞)、O (目的語) という語順で並ぶ言語のことで、SOV 型は

SOV という語順で並ぶ言語のことです。世界の言語を語順で分類すると、SVO 型は 37%、SOV 型は 45%、VSO 型が 18% あります。SVO 型には、フランス語、スペイン語等のロマンス語、英語、ドイツ語、オランダ語等のゲルマン諸語 (なお、ドイツ語、オランダ語では主節は SVO で従節は SOV)、フィンランド語、中国語、タイ語等があります。SOV 型には、日本語をはじめ、朝鮮語、アイヌ語、アルタイ諸語、ヒンディー語、ネパール語、アムハラ語 (エチオピア)、ケチュア語 (南米)、チュニア語 (北米) 等があります。VSO 型には、アイルランド語やウェールズ語等のケルト諸語、ヘブライ語、アラビア語、イースター島語やサモア語等のマラヨ・ポリネシア諸語等があります。

私達 SOV 型の言葉を話す日本人が、SVO 型の英語を学習するのですから、このシンタックスの違いを徹底的に頭に入れることが最も大切です。シンタックスの違いを一つの例文でみてみましょう。

I gave a present to Kyoko in the restaurant yesterday.

昨日レストランで恭子にプレゼントを渡した。

これをみると、英語と日本語は語順が殆ど逆だとわかります。こんなに語順の違う英語をマスターするにはどうしたらいいのでしょうか。幸いにも、英語の勉強には「5文型」という、英語の最も基本的な骨組みを表す方法があります。英文は、全てこの5文型のどれかに分類できるわけではなく、細かく研究すると、いろいろな問題がでてくるのですが、教育上の便宜を考慮した結果の分類だということのを頭の隅に置いた上で、この5文型をフルに活用して、英語のシンタックスを頭に入れていくのが一番です。頭に入れるには、基本5文型が口をついて出てくるように、一日

に5文型の例文ひとつずつを何度も口に出して読み、そらで言えるようにし、その例文を書いて覚えるという作業を毎日繰り返すことです。最初は簡単な5文型の例文から始め、少し複雑な5文型の例文に移っていくとよいでしょう。

簡単な5文型の例

- 第一文型 (SV) The baseball game started.
 第二文型 (SVC) The child looks happy.
 第三文型 (SVO) She has a lot of friends.
 第四文型 (SVOO) He bought his son a bicycle.
 第五文型 (SVOC) We call his son Max.

少し複雑な5文型の例

- 第一文型 My father started for America on business.
 第二文型 He was late for school yesterday.
 第三文型 I don't know what she means.
 第四文型 I will tell you the shortest way to the station.
 第五文型 I felt my heart beating violently.

5文型の文例は、参考書の5文型を取り上げている章に沢山のついていますし、辞書で動詞を引けば、いろいろな文型の例文がのついていますので、挑戦してみてください。

5文型の暗記が軌道にのったら、複文の暗記を付け加えていきます。量は自分のペースに合わせて決めていけばよいと思います。複文とは、主節と従節からなる文で、従位接続詞によって導かれるのが従節です。だから、沢山ある従位接続詞のついた文を毎日自分のペースに合わせて、5文型のように、口をついて出てくるまで覚え、文も書けるようにしていけばいいのです。従位接続詞には、thatをはじめ、whether, if, when, while, after, as, before, till, until, since, once, because, though, although等、よく知っているものの他にも、初めて出会う珍しい接続詞や、二語以上からなる接続詞等も含めると50以上はあ

ります。例文の調べ方は5文型の例文の調べ方と同じです。

複文の例文

1. He arrived after you had left.
2. He gave his body to the hospital before he died.
3. She came in just as I was going out of the door.
4. Though she had a bad cold, she went to work as usual.
5. I wouldn't marry you if you were the last person on earth.

(3) 練習量が実力をつける

英語の実力をつけるにはスポーツと同じで、1に練習、2に練習しかありません。5文型と複文の例文を毎日覚える作業を繰り返すことです。この他に、未知の単語、英文を勉強したら、すぐに単語と文のメモを作り、声に出して読み、紙に書いて覚えていくことです。短期記憶は海馬で、長期記憶は側頭連合野で行われていることがわかっています。繰り返して覚えていくということは、短期記憶を長期記憶に定着させていく作業であり、脳科学者の茂木健一郎氏は「鶴の恩返し勉強法」を薦めています。これは、茂木流記憶術のことで、なりふり構わず声を張り上げて単語や文を覚え、体全体で覚えた単語や文を紙や空中に書いていくもので、時には白目をむいたり、頭をかきむしりながら、苦悶の表情を浮かべて、記憶に定着させていくもので、これは人にはみられたくない姿なので、「鶴の恩返し勉強法」と名づけられたものなのです。側頭連合野は五感を司る部分でもあるので、表情たっぷりに声を出して読み上げながら書いて覚えていくという作業をしていると、側頭連合野が活性化され、長期記憶が定着していくそうです。

リスニングも、1日20分~30分と決めて毎

日取り組むことが大事です。テレビやラジオの英会話でもいいし、TOEICのリスニング部門でもいいので、毎日こつこつやるのが大切です。英語でひとりごとを言ったり、英語で日記をつけるのもいいですね。

(4) 興味深い英語習得法はないかいつもアンテナを立てておくこと

こうした積極性が大事ですね。例えば、NHK テレビ英会話「ハートで感じる英文法」では、文法は必要だけど文法名称は覚えなくていいというスタンスで興味深く教えています。TO不定詞ならTO不定詞の「キモチ」を知ることが大事だと教えています。TO不定詞は「足りないを埋める」のが「キモチ」だと教えています。It's exciting to try new things.を例にとると、何がexciting(ドキドキする)なのかというと、TO以下がそれを埋めているというように考えればいいのだと教えています。こうした興味深い教え方をしているものに出会ったら、それを欠かさず見続けると、自分の英語力が何ランクも上がります。「求めよ。さらば開かれん」の積極性がやはり必要ですね。

(5) 集中力をアップさせる工夫をすること

① 「短時間集中法」

これも、茂木健一郎氏が提案されている集中法で、集中できるような状態ではなくても、いつでも、どこでも、ちょっと時間ができたら、無理やり始めてしまうといいと言っておられる集中法です。電車を待っている間とか、病院で順番を待っている間とかにでも、すぐ集中モードに入るといいということです。神経細胞ニューロンは、何かの行動をとる時、他のニューロンと組み合わせられて、その行動を行う回路を作るそうです。それが繰り返されると、その回路が強化されるということで、いつでも、どこでも、す

ぐに集中する行動を繰り返せば、その集中する回路が強化されて、すぐに集中状態に入れる脳を作るといことです。お試しあれ。

② 不要な脳活動をさせない工夫をする

何かを聞いても脳が働かない音を聞きながら取り組むと集中力がアップすることがわかっています。ヘッドフォンで自然の音(波の音、風の音、川のせせらぎの音等)を聞いても脳は働かず、他の雑音を消してくれるので、集中力はアップします。いつも歩いている道も不要な脳活動がないので、ものを考えるのに適しています。また、電車に乗っている時に聞こえてくるゴーという音も気にならず、集中させてくれます。

③ 小刻みな目標を立てる

ここまでやったらテレビを1時間みようとか、これが達成できたら旅行へ連れていってもらえとか、これも自分のペースにあった目標を立てるといいと思います。

④ 集中ワードを書いて見えるところに貼って毎日読む

英語習得を、情熱をもって、かつ継続的に進めるために効果のある言葉を紙に書いて、見えるところに貼って毎日読むと集中力アップにつながります。例えば、次のようなものはどうでしょうか。

1. 継続は力なり
2. 習うより慣れよ
3. あきらめる癖は、何か1つのことを通して具体的に克服しよう!
4. 夢を失うよりも悲しいことは自分を信じてあげられないこと
(平原綾香の「ジュピター」より)
5. 今日1日のご褒美に明日がある
(何かの宣伝文句)

6. 辛いという字は幸せという字に似ている

辛いという字に棒を一本加えると幸せという字になります。今は勉強辛いけれど、それを乗り越えた先には幸せが待っている、と考えれば、今の辛さもバネにできると思います。

7. Where there is a will, there is a way.

(意思あるところに道あり)

これは一押しの集中ワードだと思います。「やる気さえあれば道は開ける！」人間は、何かを志すと、凄い力を発揮すると思います。口笛チャンピオンとか、縄跳びチャンピオンとか、ヨーヨーチャンピオンとか、暗算チャンピオンとか、こうした人達は、皆それを志したからです。また、学校全体で志を立てるところも増えていて、私がテレビで見た春日井市の春日丘中学では、2年次の1月に「立志式」を行い、志をめいめい確認し、達成を誓うそうです。また、以前テレビで、昭和37年に岩手県沢内村の乳児死亡率ゼロを達成した沢内村村長深沢晟雄（まさお）氏の話を見ました。昭和31年には69.6%あった乳児死亡率を、志して5年でゼロにされたのです。「赤ちゃんは村の宝。死なせてはいけない！」この熱い思いで村の意識を改革し、東奔西走して乳児医療費無料化を実現させ、村の乳児死亡率ゼロを達成させたのです。まさに「意思あるところ道あり」ですね。

終わりに

日本の英語学習200周年を記念して、日本の英語学習200年の歴史を概観し、英語の魅力と習得法についてまとめてみました。昨年の秋、この論文の原稿を最初に取り上げた時

に、学生達に読んでもらい、自分が考える、英語の勉強に「切実さ」を感じるにはどうしたらよいかを書いてもらったところ、いろいろな意見を書いてくれました。英語が上達しないのは、英語を積極的に使わないからで、目的をしっかりと持ち、失敗を恐れず、積極的に使うことが大切だとか、使わざるをえないように第二公用語にしていまえばいいとか、国全体の学習観の改革が必要だとか、強烈な意見がありました。また、個人的に英語を身近なものにしていくキッカケを多く作り、英語の魅力に触れてもっと学びたい！というエネルギーな思いを一人一人が膨らませていけばいいとか、何か一つ目標を立て、それを実現している自分を想像することによって意識を変え、切実さを生み出したいと思うといった意見があつて、大変参考になりました。また、「この論文を読んで、気合いを入れて英語を勉強するか、という気持ちになってきた。まだ、切実な気もちではないが、今湧き上がっている感情を大切に、英語学習に励んでいきたい」と書いてくれた学生もあつて、この論文の目的をある程度達成したのではないかと思いました。学ぶに遅すぎるといふことはないと思います。これを機に、学生の皆様が英語の勉強に一層のエネルギーを注がれることを祈念しまして、終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

参考文献

1. 桜庭一郎『英語史概要』、篠崎書林、1975.
2. 水谷信子『英語の生態』、ジャパントタイムズ、1981.
3. C.L. Wrenn, *The English Language*, Kenkyusha, 1969.
4. 中尾俊夫『英語の歴史』、講談社、1992.
5. 渡部昇一『英語の語源』、講談社、1976.
6. 渡部昇一『日本語のこころ』、講談社、

1973. 2・3, NHK, 2006.
7. 藤田実・平田達治編『ことばの世界』, 大修館, 1986.
10. 竹林滋『英語音声学入門』, 大修館, 1986.
8. 原沢正喜『現代英語構文の実際的研究』, 大学書林, 1965.
11. 村野井仁他『実践的英語科教育法』, 成美堂, 2001.
9. 大西泰斗『ハートで感じる英文法』 1・2
12. 片山嘉雄他編『新・英語科教育の研究』, 大修館, 1994.